
零崎蘭織の人間怪奇

佳織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

零崎蘭織の人間怪奇

【Nコード】

N7595X

【作者名】

佳織

【あらすじ】

俺の名前は零崎蘭織。

二つ名は歪空肋骨・ブラインドインサイド・

死にたくなければ近付くな。

さもなければ卅拾秒後、零崎を開始する。

異識シリーズ（前書き）

自己紹介

異識シリーズ

名前：零崎園識 せうき うえの じき

本名：一年乃紀 ひとこ しのき

「春夏秋冬兄妹とは従兄弟。

本編では頻繁に春夏秋冬兄妹です。」

二つ名：静寂・イミテーション・

年齢：15

血液型：O型Rh+型

誕生日：2月10日、水瓶座。

身長：168cm

体重：49kg

経歴：

1歳〜5歳

6歳、小学校に行く必要もないので未入学。

当時から電子化学に興味を持ち始め、

7歳でアメリカへ留学。

12歳帰国。玖渚機関よりも高い地位を手にする。

母親が死亡。事件に巻き込まれ相手は自分の母親の心臓をもぎ取って逃亡。

母親が亡くなったショックで零崎に目覚めた堵澱は、

犯人と思われる相手の心臓を片っ端からもぎ取る。

それから3年、人殺し進行中。

.

1章 俺には何も出来なかったから（前書き）

能力を持った人が、羨ましかった。

1章 俺には何も出来なかったから

俺はある事情があつて、今京都の外に來ている。

元々は潤さんが請け負つた仕事だが、

潤さんも潤さんで今京都から離れるのは難しいらしい。

そしてやることもなく暇で仕方なかつた俺を見つけた潤さんは（俺が殺人鬼だと知つてゐるくせに）、

俺にこの依頼を頼んだ。

悪魔が云々とか、エクソシスト被魔師が云々とか、そんなの。

確か悪魔を抜うとか何とか。俺にはその素質が云々とか何とか。

俺の紅い髪は目立つため、舞織さんから借りたニット帽を被り、

人識さんから借りた（何故持つてゐるのは知らないが）ウィッグをニット帽で無理やり押し込んで、

俺の普段着のコートを着て、ブーツを履いていた。

俺のは自分で言うのもなんだが華奢で女顔だ。

ともかく俺は今女々しい服を着て女顔なので他の奴等からは多分女に見える事だろう。

俺は適当に新しい土地でぶらぶらとやることもなくうつろっていたら笑い声が聞こえた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・！！」

「・・・・・・・・！！・・・・・・・・！！」

おや、喧嘩をしているようだ。

青黒い髪の少年と何かヤンキーっぽい人。

俺は素通りしようとその人の前を通り過ぎ・・・

て、あれ、

「おーっと、お嬢ちゃん？」

中々可愛いじゃん」

「・・・・。」

いい迷惑だ。

青黒い髪の人が殴りかかろうとしていたが睨んで止めた。

「・・・・ああ、えーっと、何か用ですか？」

「俺の女にならないかって、言っただけど？」

・・・まあ、待て待て、そう慌てんなって。

「・・・えつと、君。」

俺は青黒い髪の人言う。

「え」

「悪いね、後ろを向いてくれないかな」

俺は向き直る。

「・・・ただいまより壱拾秒後、零崎を開始する」

「あ？てめえ何て・・・」

「拾」

俺は眼を閉じる。

「九」

「八」

「七」

「六」

「伍」

相手が一步後ろに下がる。

「四」

俺はポケットに手をいれる。

「参」

「弐」

俺はポケットで準備完了。

「壹」

俺は眼を開いた。

「零。」

零崎を始める」

俺はナイフを振り上げた。

グシャッ バチャッ ベチャッ。

大まかに言えばそんな音がした。

えーと、現状説明。

ナイフをさしてグシャッ

血が噴き出てバチャッ

内臓が落ちてベチャッ

「ひ、い、

ぎ、ぎゃあああああああ！！！」

男達は走る。

「二度と来るなよー」

なんていうよくある台詞を自分が人を殺しておきながら吐いて、

青黒い髪の人に向き直る。

その人はこつちを振り返っていた。

「少年よ、今からでもやりなおせる。

今見たことを記憶から消せばっ」

チョップされた。誰だ。

「・・・蘭識？」

そこには満面の笑顔で拳をグーにしている。

人識兄さんの姿があった。

「に、兄さ・・・っ」

「お前そんな簡単に人殺すなっつてんだろーが!!

お陰でこちらまで被害あつてんだぞ!

京都ならまだしもこっちでは人殺すな!!

ここは^{エクソシスト}被魔師っつー何かやばい呪い名みたいなのが居るらしいんだよ!」

「すいません・・・、

はい・・・、はい・・・、

あ、^{エクソシスト}被魔師ですか。

それは何か変な坊さんみたいなのじゃないんでしたっけ。
この世に居てはならぬ云々を退治とか」

「そっなのか？」

「はい、でも警察みたいな行動とつてるとかどうとかへばっ」

「警察じゃねーか!!」

俺達だって見つかりやこの世に居てはならぬ云々の部類に入んだろーが!

俺達は殺人鬼なんだぞ!!自覚あんのかよ!!」

「兄さんこそ場を弁えて下さい。隣に一般人が居るんですよ」

「・・・」

あ、兄さん硬直した。

「あ、殺人鬼というのはゲームでのギルド名です。

ちょっとばかり僕等厨二病で一般人に自慢したくなる人なんですよ。

人を殺すつてのはゲームでして・・・。」

シドロモドロシドロ。

「真下に死体が・・・」

「うおおおう!!驚きたネ!!」

まさかこんな所に死体があるなんて、この名探偵園識がすぐに解決するぞい!!

じっちゃんの名をかけて!」

「じつちゃんが被害者かよ」

「犯人はこの中に居る！」

「お前だよ！」

青黒い髪の人に頭を叩かれる。

おお、ノリの良い人だ。

そしていーさんもこんな事してたって聞いたな。

「あー、ええと、人識兄さん、もう後がないよ。
零崎やつてもいいですか。」

「あー、仕方ねえだろ。
じゃ。短い間だったけどよ、少年。」

二人の顔つきが変わる。

「時間が無いので短縮。
零崎まで後参秒。」

「参・・・
弐・・・
壱・・・」

「殺して解して並べて揃えて晒してやんよ」

「零。」

ただいまより零崎を開始します。」

人識兄さんがナイフを振りかぶると、

俺がスタンガン（闇口教会の）を相手の額に押し付けるとはほぼ同時だった。

だが。

「！！」

相手は青い炎を出した。

何か、蒼い炎。うん。蒼いほのー。

「・・・なんじゃこりゃー！！！！！！
どーいうことだいにーさん！！

これこそ、

なんじゃこりゃー！彼の身体がハンニバル！！そこから死ぬ気の炎が燦然とっ！

じゃないですか！」

「えっ」

相手から炎が消える。

冷静になったようだ。

「とりあえず誤解解こう人識兄さん」

「人殺しに誤解も糞もねーけどな」

かくかくしかじかそれからそれからどーなった」

10分後。

「かははっ、そうだろ！？そう思うよな！」

「おーおー思う思う！！弟使いが荒いって奴だよな！それ！」

「人識兄さんは弟でもあるけど兄でもあるんじゃないの」

「はあ？蘭織クン？蘭織クンも兄の立場だろーが！」

「痛いです兄さん酔っ払いですか」

「え、人識が兄で弟、蘭織も兄で弟って、どんだけ家族居るんだよ」

「あー、えっとな、零崎一族ってのがあってよ。」

零崎三天王の一人であリーダー的みたいなのが、

俺の兄の零崎双識って奴。

異名は
マインドレンデル
自殺志願。

そんでもう一人の零崎三天王の二人目は、
また俺の兄の零崎曲識。

異名は

ボルトキープ
少女趣味

そんで最後の零崎三天王の一人、

俺の兄の零崎軋識。

本名は式岸軋騎。

異名は

シームレスパイアス
愚神礼賛

そんで零崎常識。

異名は

ペリルポイント
寸鉄殺人。

そこから俺、零崎人識。

本名は汀目俊希。

俺の知り合いから「人間失格」つつわれたがそれは異名じゃねえな。

その一つ下の弟の、

零崎殺識。

本名は春夏秋冬殺鬼。

異名は

カレイドスコープデイスベアー
ナバームフェイク
昏迷僭主と、
人形煉獄。

それから俺の妹の、零崎舞織。

本名は無桐伊織。

そんで一番最年少で零崎史上最弱で最強の、
零崎楽織。

本名は春夏秋冬喜樂。

異名は

カレイドスコوپアイズ

墮落幻影と

二重解体。

こいつは特別ってか何でも愛着ついてっから、

チェーソーの異名は

微小童話、

マスケット銃の異名は

傀儡公主。

父親は零崎零識。

母親は零崎機織。

「どっちも俺が生まれてすぐ死んだ。」

「
は
|
 h_0
」

その時。

T T T T T T T T

h?

「お？」

「あ？」

3人が音の方へ振り返る。

「おわーーーー!!びゃあああー!!」

「ッ、楽織!」

「あつ、兄さん!この子捕まえて!」

「は・・・?」

真横を走る(遅い)少女を燐はとっ捕まえた。

彼女の腹部に片腕を回して持ち上げる。

「びゃっ!Σ」

「コイツか?」

「あわ、あわわわわわわわ」

2章 友好関係を築き上げるのは（前書き）

俺はもう慣れている。

2章 友好関係を築き上げるのは

雪男はむすつとした表情で縛られた少女を見ながら紙を読み上げる。

「春夏希良々。年齢15。零崎一族を名乗り40代後半男性を襲う。

バラバラに解体。

それも人ごみの中で。

後に警察が駆けつけるも逃亡。」

「大胆だな喜楽」

「そりゃどーも」

「褒めてねえよ。お陰さまでこっちは捕まってるんだ」

「兄さんも悪いですよ。」

あっさり一般人に零崎を全部語っちゃって。

それどころか異名と本名まで言うとは何事ですか。

身の程を知ってください。」

「仕方ないだろうが。燐は後で殺すつもりだったんだよ」

「絶対嘘ですよね兄さん。」

「すごい楽しんでたじゃないですか」

「うつせえ。」

「喜楽。お前怒れ。」

「はい！？兄さん知らないんですか。」

「感情論つてのがあつてですね」

「お前怒ったら凄い事になるじゃねーか」

「言われて怒ったりしませんよ私。」

「というより兄さん曲弦系使えるんじゃないでしたっけ。」

「あ、そっか」

「まあ私本気だせばこんなロープ簡単に解けますけど。」

「んんーっとお！！！」

「ロープが千切られる。」

「あーえつと逮捕はちよつとタイムだよ。」

もぞもぞと人識は小さく蠢く。その5秒後ロープが全て解かれた。

「俺も俺も」

「うわ！人識どうやってロープ切ったんだ！？」

「曲弦系っていう糸を使っただよ。

あんま使わねえし向いてねえんだけどな。

よし、事情説明。」

かくかくしかじか。

「ふーん・・・、つまり春夏秋冬さんは」

「喜樂でおっけー！むしろ喜樂じゃないと殺す」

「お前は人殺し好まないタイプじゃねーのかよ」

「はわっ！おにーちゃんいつのまにっ！」

「春夏秋冬兄妹・・・。」

「んだよ雪男。知ってんのか？」

「春夏秋冬兄妹と言えば、

父親が軍人、母親が武器職人の・・・」

「そだよん、

・・・父ちゃんも母ちゃんも戦争国に7年前行っただけ、帰ってきてないけどね。」

「何か言ったか？」

「へ、ううん。なんでもねえよう。」

あ、誤解解きタイム。

私は要するに・・・。」

・・・

「きゃーたすけてー！」

「フッフッフこいつを解放してほしけりゃ金を出しな！」

『まてーい！零崎楽織、参上！

いざ参る！あつ、間違えた！

えー、ではただいまより、零崎を開始しまーっす！

せりゃー！』

・・・

「というわけだから私は何にも悪くないよ。

相手の持ってたあれは多分拳銃。

種類はマシンピストルかな。

銃弾が20以上入るしその上発射速度が異常に速い・・・。

相手が引き金を引くのと警察が引き金を打つのだったらもちろん零距离の相手が有利だ。

仮に先に撃たれたとしても道連れに出来るからね。

あれしか無かったんだよ。」

「物知りなんだな」

「だって私100以上銃持って・・・

げふんげふん。銃マニアだからね。

マスケット銃が最近のお気に入り。」

「でも喜樂さんが駆けつけるほどの時間があつたんなら警察に任せれば……。」

犯人から銃を取り上げたんですか？」

「ああ、いや。私そんな近くに居なかったし。

人ごみに紛れて6メートルくらい先に居たし。

ちなみに相手には1発も撃たせなかったよ。

気付かれなかったし。」

「気付かれずに人を殺した……？」

「それと私は銃を使わなかったしナイフも使わなかった。

槍も斧もチェーンソーも、皆に怪しまれる物なんて何にも使っていないよ」

「……あー、そういう事か。

確かにアレは怪しまれねえな。」

「……。」

よし、見直してみよう。

相手はバラバラに解体されていた。

私は遠距離に居た。

ナイフなどの凶器は一切使っていない。

そして、兄さんはさっき、どうやってロープを切ったっけ。」

「・・・糸か！！！！！」

「ぴいーんぽおおおん！！だーいせーいかーい！ご名答だね！おめでとーん！」

そう！私は曲弦糸で相手をバラバラにしましたー！」

「ハイテンションで言うことじゃねえだろそれ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7595x/>

零崎蘭織の人間怪奇

2011年11月13日21時02分発行